

D. 継続的・計画的な進路指導についての研究

鈴木洋一郎 新村 泰子 原田 秀雄 中野 満男 加藤 剛

倉田 有邦 高橋みな子 霜田美津子 富田 昇

まえがき

戦後、学制改革によって男女共学、六三三制が施かれ一応単線型としての長所に認められながらも、形式的画一主義な傾向があり、男女の特性に応じた教育も十分に行なわれてきたとは言いがたい。高校が準義務教育と言われ能力差のある生徒を多く入学させながら一方では同じカリキュラムによって学習指導するために自然と落伍者や疎外者も多くなってきている。しかも中学も高校も卒業前年になると進学指導中心から予備校化するようになり生徒の個性・適性を考えた所謂応能教育は殆ど不可能なのが現状ではないだろうか。

憲法や教育基本法では国民はそれぞれ能力に応じてひとしく教育を受ける権利のあることを明記しながらも、実際は行なわれているだろうか。普通学級において同一教材を同一進度で平等に教えるということは一見機会均等のように見えるが、このような形式的平等主義については世界の教育界は最近特に批判的である。しかも日本人からは「差別教育」ともみられる能力別クラスを編成して、生徒の能力や個性才能に応じた教育からあまねく英才を開発してゆこうとする積極的な機運が欧米諸国に強く動いている。

このグループは以上の視野に立ってこれらの問題を十分に意識して、中等学校における進路指導上とりあげられる諸点を探求し、一貫せる計画と実践とをまとめようと試み、この目的を達成するために次の三つのテーマをそれぞれ分担することとした。

1. 特別教育活動特にクラブ活動と指路指導
2. 適性能力とカリキュラム
3. 能力開発と進路指導

これら三つのテーマは大体次のような順序に従ってその結果をまとめることにした。まず最初は必要な資料の蒐集と指導計画をたてることであり、本年のレポートもこの点で考えてゆきたい。次にその計画に従って指導の実践とその効果についての評価であり、最後にこれら指導の反省として問題点の分析と発見、更に新しい計画の考究へと予定している。以下、これら三つのテーマについての意図するところを述べてみたい。

本 論

研究のねらい

1. クラブ活動と進路指導

特活が教科学習と同等に重視されているのは新教育課程の特色である。しかし特活の生徒会活動やクラブ活動は種々な問題を残したまま、学校の意図に反してその成果を十分には挙げていない。この活動は教科に対して附随的になり、また最高学年においては全く軽視され殆どの生徒がその活動から隠退してしまう。受験を前にしたこの学年においてはこのクラブ活動は学業と両立しないものなのだろうか。これが第一の問題である。また果して両立しえないものとするならば、どこに困難点があるのか、その困難点を追究してその対策を考えてみなければならない。これが第二の問題である。最後にはこれら特活の指導の達成はどの程度まで望むべきかということである。人間形成の上から特活の意義は誠に大きいものであるにもかかわらず「受験」という関門を意識するときこのクラブ活動は、文科クラブ・体育クラブを問わずその参加意欲を低調にしてしまう。このジレンマを克服して教育本来の姿に考えてゆきたいと思うのがこのテーマのねらいである。

2. 適性能力とカリキュラム

現行のカリキュラムが個人の能力を考慮して編成されているものだろうか。確かにコース・オブ・スタディとしていくつかのコースが考えられているが、その実施にあたってその意図が十分活用されることができなかった。特に学力差の著しく現われる数学・理科英語などの教科において、一斉指導とコース別指導との比較や現カリキュラムを実施するにあたり、女子の能力や適性を十分に考慮したコース設定についても触れてみたい。即ち現行カリキュラムを忠実に女子に実施する場合、教科によっては理解の困難な高度なものがある一方またそれに代って、女子の特性を十分に伸ばしうる教科や時間が考えられていない。男女共学は同一の教材を共に学ぶという画一性を指すものではなく、両者の特性を十分に達成しうるようにつくられ

なければならない。この高校の前半においては、文科的、理科的な適性能力の発見のための試みも重要なことは言うまでもない。

3. 能力開発と進路指導

ここでは最高学年における進路指導の目的とその計画についてまとめようとするものである。適性能力の発見とその開発は進路指導上の最大の課題である。われわれが生徒を指導していて、受験直前において志望学校の変更、学部の希望選定についていくつかの質問を受ける。予め生徒の適性を十分に把握した上で指導していても、その適性能力が十分に開発されて来ない場合である。能力の把握とか成績の診断分析を正確に綿密に行なうことの必要さが痛感されるのである。この資料を提供するものとして多くの調査やテストが行なわれている。しかし回数が多くてもその調査項目や内容の意図が不明確であったり、テスト問題作成にあたり「ねらい」の明示、事前事後の指導、また予想される誤答などの配慮、そして生徒の実力に即し資料性として利用度の高い結果のえられるという見透しを以てなされなければ、進路指導としての効果は少ないものである。この観点から調査やテストのあり方と進路指導の計画についてまとめてゆこうとするのである。

以上、三つのテーマについての研究の「ねらい」を述べて来たが、これらについて今まで考えまとめた結果について述べることとする。(鈴木記)

研究の経過

I. テーマ 特活と進路指導

進路指導と関連して生徒会やクラブ活動が、学習成績、受験勉強、卒業後の状況にどのような結びつきをもっているかについての研究

I ねらい

生徒会活動やクラブ活動は学習成績にどのように影響しているであろうか。

私たちは生徒の学力の向上を願う半面、生徒会やクラブ活動の面においても十分活躍することを期待する。そこには学習とクラブ活動とをうまく両立させ、両面に十分な成果のあがることを期待しているのである。しかし学年の進むにつれて進学の問題が次第に大きく生徒の生活場面を占めるようになり、生徒会やクラブ活動は、彼等の生活場面からはみ出してしまうようになってしまう。このことは最高学年において特に著しい問題であろう。そこでこの相反する生徒会やクラブの活動と学習とをどのようにしたら両立させ得るか。或いは絶対に両立させ得ないものなのか。両立させるためにはどこにどのような隘路があり、どうしたらその隘路をきり開くことができるかについて考えてみたい。又こうしたことについて生徒はどう考え、

教師はどう考えているか。その考えは一致するか、しないか。一致させるにはどうしたらよいかなどについても考えてみたいと思う。

II 方法

以上のようなねらいにそって問題をほりさげてゆぐために次のような方法を考えてみた。

1. 生徒の学業成績の推移と生徒会やクラブでの活動状況について

よく生徒会の役員をしたり、クラブ活動を熱心に行ったため学業成績がさがったということを聞く。果して生徒会の役員をしたり、クラブ活動を一生懸命すると成績に何らかのマイナスの影響がでるものなのだろうか。勿論、生徒会やクラブの活動が精神的にも肉体的にも負担を伴い、時間的にも相当の消費であるにはちがいない。しかし、どの程度学習に影響するかについてしらべてみようと思う。

更にそれとは反対に生徒会やクラブでの活動の効果の顕著なことが学習意欲をおこさせ、学習に何らかのプラスの影響のことはないだろうか。生徒会やクラブの活動でしっかりやれたことが、生徒の生活にはりをもたせ、自信をもたせ、学習もしっかりやるようになり、学業成績が向上したという例もあるのではなからうか。

以上のように生徒会やクラブでの活動が生徒の学業成績に及ぼす功罪について調べ、検討してみたいと思う。

2. 卒業学年の生徒会やクラブでの活動の低調な原因について

本校においては全校生徒が何れかのクラブに所属して活動することになっている。2年生までは出席も厳重にとり、出席率の低いものについてはクラブ役員や顧問から注意があり、割合全員が活潑に活動している。しかし最高学年については活動への参加は自由となっており、クラブ所属も一部のものを除いては、単に名目のみになっている。このことは受験地獄といわれる現代にあって、最上級生となって受験の重圧がいよいよ現実に近づいた感じをもち、いわゆる受験勉強と称する家庭学習に、相当の時間をとろうとすると、いきおい、睡眠時間や、生徒会、クラブのために費やす時間を減らすようなことになってくる。しかし2年生まで一生懸命クラブ活動をしていたものが、今までクラブ活動についやしてきた時間を3年生になったからといって急にそれだけ学習に時間を実際にとっているのだろうかという疑問である。そこで考えられるのは①今までクラブ活動に費していた時間を学習にふりかえたもの、②今までクラブ活動によって費していたエネルギーを温存しようとする者、即ち疲労だけを取り除

D. 継続的・計画的な進路指導についての研究

こうという消極的な考え方のも、③クラブ活動をやらないということが一種の学習に対する安心感を生み、精神的な安定を得ようとするもの、④みんなが活動しなくなったのに自分だけがやることは恥かしいという罪悪感や他人とのおつきあいの考えのもの、⑤親の圧力によってやむなくやめたもの等、種々の原因が考えられる。そこで3年生がクラブ活動というものについて、学習との関係をどのように考え、どのように対処しているかをしらべ、分析してみたい。

3. 在学中の生徒会やクラブでの活動状況と卒業後の状況について

在学中の生徒会やクラブでの活動状況が卒業後の彼等にどのように影響しているかということは、今後の生徒会やクラブ活動の指導にとって重要な役割を果たすかも知れない。進学して在学中と同じクラブ活動をするもの、全然ちがったクラブにはいるもの、クラブに全然はまらないもの、在校中余り熱心でなかったものと熱心であったもの、それらがどのように組み合わせられているかを分析してみたい。

4. 他校のクラブ活動の状況について

本校のようなクラブ指導によって本校の生徒がどのように考え、どのようにやっているかをしらべ、分析すると同時に、他校においては問題をどのように考えどのように指導しているかを調べ、本校のやり方や考え方と比較分析して考察してみたい。

(原田・加藤・霜田記)

II. テーマ 適性能力とカリキュラム

1. 個人差とカリキュラム

現在全国中学校卒業者の高校進学率は70%を越え、愛知県では、県教委の発表によると、本年度卒業予定者の高校希望者は、名古屋市内で84.9%、県下でも初めて80%を越した。今後ますます進学率が伸びることが予想され、高校教育が準義務制になりつつある時、当然大きくなっていく問題として、生徒の能力差をどのように配慮すべきかということがある。全国普通科高等学校長会(全日制)でまとめた調査によると、高校入試の成績において、とても高等学校の授業についていけないと判定されるCクラス(39点以下)の割合は、数学で24%、英語で20%(40年度)という有様で高校の学年進行に伴ってこの割合は非常に大きくなる事が明らかである。

高校進学率の増加は、単に「数」の増大を意味するばかりでなく、「質」の多様化をもたらす。そういう状況の中で、生徒の能力・個性を生かすために、どのような策が取られねばならないだろうか。

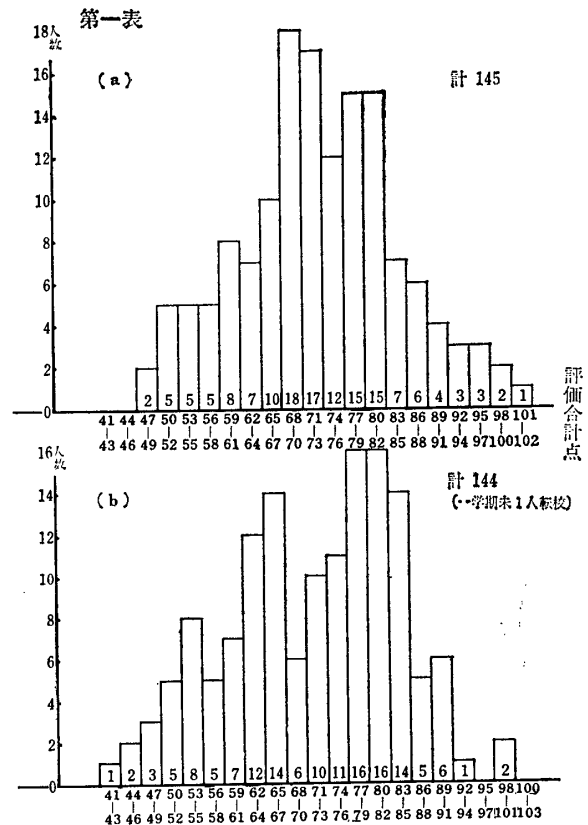
例えば、中央教育審議会・第二十特別委員会が着手した中間草案では、「画一化している高校教育にビジ

ョンを吹きこみ、真の能力開発を行なう教育こそ民主的で機会均等の教育であることを力説し、全日制普通科の場合、生徒の質の多様化に即応する体制として、才能コース(学問的または芸術的専門家の養成)文科コース・理科コースなどいくつかの系統に再編成し、生徒の能力、志望に応じた教育を行なう。」ことを第一の狙いとしている。(昭和40年11月24日毎日新聞)

生徒の個人差に応じたコース別教育を、一定の地域内でいくつかの高校が分かれて行なうのがよいか、一校内にいくつかのコースを設けるのがよいか、それぞれ長所短所があって論議は尽きない。

本校では生徒選抜方式の関係上、現在生徒の学力差が相当大きい。しかも本年度から学級増により3学級になったという小規模学校で、限られた教官定員のもとでは、生徒の学力差に応じたカリキュラムを組むことは困難が大きい。教科によっては配慮されているが、全体としては検討の余地が残されている。現実の条件の中で、どのようなカリキュラムが望ましいか、主として40年度入学生を対象として、彼等の学力の伸び方、その差の生じる状態などを観察・調査・検討し、それに基づいて適切なカリキュラムを考えてみたいと思う。

以下に記すのは、対象学年の成績の状態である。



第一表は12教科 *を10点法により評価したものを各人毎に合計し、合計点によって集計した結果である。

(a) は第一学期 (b) は第二学期

グラフの型からも分るように全体として第二学期の方が第一学期よりも評価合計が低くなっている。どの位低くなったかを次の様にして調べてみた。

一学期に70点のものが二学期に75点とった……+5
 一学期に80点のものが二学期に76点になった……-4
 このようにして各個人について+-を出しそれらを合計して総人数144でわると、 $\frac{-225}{144} = -1.6$ という値が出る。平均一人1.6点ずつ下ったことになる。ところで第一学期の評価の中、最下位から1割、即ち下位14名についてみると次の通りである。

第二表

一学期評価合計	二学期評価合計	±
49	41	-8
49	49	0
51	48	-3
51	52	+1
51	44	-7
51	44	-7
52	52	0
53	48	-5
54	53	-1
55	54	-1
55	51	-4
55	56	+1
56	54	-2
57	52	-5

±の合計-41

一人平均 $\frac{-41}{14} = -2.9$

総合成績において全体の一人平均よりはるかに大きく低下したことを示している、この下位14名を全体の144名から除いた130名についての一人平均をみると-1.4となるから、これらの下位グループはそれを除く人々の2倍以上の巾で低下したことが分る。

さらに能力差の大きくあらわれる一つである数学についても次のような数学が出ている。一学期、二学期のそれぞれにおける中間、期末テストの合計点（100+100=200……満点）を比較したものである。

第三表

一学期	二学期
90	45
67	5
54	21
65	29
59	18
79	23
79	7
92	4
93	38
86	35

27	4
84	38
51	20
104	15

順不同

全体では	最高	平均
一学期	190	105.4
二学期	164	79.6

二学期の方が問題もむつかしく全体としての実数も低くなっているが、これらの人々の中には中間或は期末テストで、完全に0というのが、それぞれ、4名ずつ出ている状態である。

一学期と二学期を比べただけでもこのよな結果が表われているが、学年がすすむにつれて、下位グループと他の人々の間がますます大きく開くのではないかと想像される。

注

12教科は次の通りである。

現代国語、古典 1、倫理・社会、地理、数学（代数）、数学（幾何）、生物、地学、体育、音楽・美術・書道の中の一つ、英語（リーダー）英語（文法）

（新村・高橋記）

2. 進路と適性能力

高校進学者の比率は年々増加の一途をたどり、準義務教育といわれるようになって今日、生徒の素質・能力の幅は極めて大きく、卒業後の進路も多種多様であることは当然なことである。このような生徒は自分の進路をどのようにして決定しているのだろうか、何を基準にして自分の適性を発見し、どのような将来への見通しを持っているのだろうか。ある程度将来を約束された素質と環境に恵まれた者が大部分を占めていた旧制の中等学校とは異なり、生徒の進路適性について生徒自身の判断や見通しはまことに不安定である。一方に相変わらずの（とは言え最近徐々に変わるきざしも見えてきたようではあるが）学歴偏重の社会通念があり、一方には甚だ貧弱な社会保障制度とあっては、ともかく量的に広げられた上級学校への進学の間へと殺到するのは当然の勢いであろう。この際進学を希望する生徒大部分の目的が、将来の安定した生活ということに置かれているのは言うまでもない。言いかえれば進学はそれ自体が目的ではなく、手段に過ぎないということである。無論すべての者がそうだというわけではない。純粋に学問研究のため、あるいは教養を高める意欲にもえて進学を志す者も数多くあろう。しかし絶対数で世界第2位という大学を持ち、なおかつ大勢の浪人を年々作り出しているほど進学希望者の多い現状において、かくも多くの者が純粋な学問を目

D. 継続的・計画的な進路指導についての研究

ざしているとは到底考えられないのである。さりとてこの現象を一概にけしからぬとし、純粋な学問を志す者以外は進学をすべきでないという考え方も如何なものだろうか。高校教師の立場からすれば、卒業後、本人にとって少しでも有利な道を行ってほしいのは当然のことであり、社会での保証のない道は、単にこうあるべきだというだけの理由で本人に押しつけることは出来ないのである。そこで一口に適性能力といっても、それを本来あるべき形で理想的に考えた場合と、現実に合わせて行われる進路選択のためのそれとが考えられる。前者は学問が好きでありそれを追求することを一生の目的としている者のことであり、現状の下ではまず少数者といっても差しつかえなからう。このような希望者を少しでもふやすような指導がなされなければならないことは申す迄もないことであるが、これらの者が少数者にならなければならぬ社会全体の状況をそのままにしては、大勢に影響を及ぼすことは不可能であろう。それにこのような本格的に学問を志す者にとって、現行の大学入試制度が、真の意味での適性を見分けるのに役立つのかどうか現在の知識量のみならず、将来のびるべき諸能力を予測し得るものであるかどうか、はなはだ疑問である。画一的でしかも細かな知識の詰め込みの受験勉強が、このような者の幾らかを真に希望する進路からしめ出していることがないであろうか。しかし大抵の学校において、進学希望者の大半を占めるのはいわば将来の身分保障のための進学、手段としての進学を望む者たちである。安定したサラリーマンへの道をめざす者、花嫁修行の肩書の一つと考える者、更には確固とした目標もなくただ漫然と高校の次には大学ということにしている者等々。しかしこれらの者として、現在の入試制度の下では安閑とはしてはられない。大学のマスプロ化、駅弁大学、更には女子学生亡国論など一部の識者から悪口をたたかれようと、彼らには彼らなりの存在理由はあり、また悩みもあるのである。

ここでかような事情の下で現在高校においてはどのような進路指導が行なわれているであろうか。もちろん一口に高校とはいってもその性格は極めて種々様々であり、特に普通課程のみをとり上げた場合でも、進学者と就職者との割合が学校により千差万別である。新制高校発足当時のスローガンとされた高校三原則が、完全につぶれ去った現在、生徒の進路は大づかみな意味では中学から高校への進学の時すでに決定されていると言ってよい。高校はすでに点数により格付けされ振り分けられて来た生徒達を更に細かくより分け振り分け、例年の「実績」に照らし合わせ、「身相応」のところを判定し、これすなわち「適性能力」

として進路指導を行なう——いささか皮相的な見方かもしれないが輪郭はまずそんなところではないだろうか。無論個人別の指導においてもっと実質的な根本的なガイダンスもなされることであろう。本人の希望をなるべく尊重しつつ、真の意味で本人に合ったところを助言するのが教師の役目であろう。しかし現行では高校及び大学の格差は厳然として存在しており、これを無視しての進路指導はあり得ないのである。問題は希望する進路と志望校の程度ということであるが、これには本人の希望の強弱、更に進めて言えば将来へのビジョンの有無が大きく作用することであろう。「〇〇大学ならこの学部でもかまわない」という考え方も、学問そのものでなく大学卒の身分が目的である以上何ら奇異とするには当たらない。要はすべての進学希望者に自らのビジョンを持たせ、少なくとも学校よりも学部の方を先に考えるように指導してゆくことが大切なのだ。いわゆる「分不相応」な大学を志望している場合、点数によってそれが不可能であることを説得するのは容易である。最近の生徒は中学以来の指導の結果、その点については極めて従順であり己をよく知っているともいう。しかしそれよりもっと大切なこと、それより先行させて考えるよう指導せねばならぬのが適性の問題である。大多数の生徒が不十分なビジョンしか持ち合わせていない現在、適性能力発見のための助言指導は極めて重要なことであり、あるいは平素の授業を通じ、あるいは話し合いを通じて適性能力をひき出すような指導がなされるべきであろう。

(倉田・富田記)

Ⅲ. テーマ 能力開発と進路指導

1. 中学校の進路指導についての一考察

進学する高校を決定する場合、どういふ考え方によって行ふべきであろうかということを考えてみたい。

とくに普通課程の場合、その選択を決定する条件は実際にはかなり複雑である。その学校独自の校風を認め、これに共鳴して選択するか、地域や交通の利便を考えて選択の重大な条件にするとかいうことは、一般にあまり行なわれていない。大部分はできるだけ競争の激しい合格の困難な学校に進学したい希望があり、これに合格の可能性というものを考え合わせて決定することが多いのである。この相反する2つの条件をいかなる比重でかみ合わせるかということが、その生徒や、周囲の人達の性格や考え方、人生観等によって変わるし、又不合格になった場合に選ぶべき第二志望の学校に対する考え方によっても変わるものであり、又ここでは経済上の配慮も行なわれることが多いであろう。又普通、この選択にあたっては、中学校の担任教

官の指導が、その生徒の学力のかなり正確な資料に基づいて行なわれることは言うまでもない。

高校の選択は、個々の生徒にとって言うまでもなく極めて重大な問題であるが、現実にもそのようにして希望がなされ、そして合格し進学する学校を選択が、それほど適切なものであろうか。たとえば、自己の力いっぱい、つまり最小限の合格可能性によって進学した場合はどうであろうか。勿論、その生徒の進学後の努力や学力の伸びというものに個人的な差があるので、そうした場合の凡どはそれを期待し、又決意を固めて進学するのであるが、その実現性についてはそれほど多くはのぞめないであろう。その反対に自己の学力に応じた、即ち非常に高い合格可能性のある学業を受験して進学した場合は、それが世間一般の評価においてそれ程高からぬ高校へ進んだことになったとしても、結局より充実した高校生活を送らせ、学力ものぼすことになり、生徒の将来により幸福をもたらすことになるのではないだろうか。

生徒が、個々の事情や学力によって進学する高校を決定する場合、周辺にあるそのような問題点をいささかでも解明すべく、主として当附属中学の卒業生の過去の場合にさかのぼって個人的な調査を試みたいと思うのである。
(中野記)

2. 高等学校の進路指導についての一考察

前節において高校への進学決定の要因について述べてきたが、ここでは大学受験に対応する高等学校の進路指導についてのまとめてゆきたい。即ち生徒の能力適性をあまねく開発し、その進路に応じた指導のもとで教育内容の多様化をはかり後期中等教育のあり方を考えようとするのである。このために一応学年別に次の目標をたてて実施することにした。

- 1年 基礎能力(学力)の充実
- 2年 文科・理科(また普通コース・家庭コース)への適性能力の発見
- 3年 希望コースへの指導

これらの目標を達するために生徒の成績の実態を調査することとして、これに次のような項目を考究することにした。

諸調査とその分析

1. 学期中に実施される学業成績テストを通じて学習基礎能力——特に英語・国語・数学の三教科の学力差(傾向)の実態を把握し、またこれら学力差の変動の追跡調査をし、更に差の生じる要因を探究していきたい。
2. 更に受験学年の実施している実力テストについては、その成績と希望コースとの相関をまとめ、

また自己の成績を予め把握するためにテストに対する自己評価(予想点記入)を正確に記入するようにしたい。またこれと同時に現行実力テストの問題についても検討する機会をもちたいと思っている。

問題点

以上の調査から予想される問題点を考えてみると、

1. カリキュラムの指導内容の量・質が学力差を生ずる原因となっていないか。

構成されている普通学級といってもその入学直後においてすでに相当の成績に上下の隔たりのあることを発見する。そしてこれらの生徒に対して所謂「B類型」の教科コースを画一的に履修させようとするとき、指導内容の量・質の理解の程度が問題となってくる。即ち学力差が一般に著しく現われる数学・理科・英語などの教科および国語の力(特に読むこと、書くこと)の弱い生徒に対しては学力差の生じる時期やその要因を速かに発見し、これに対する治療をしなければならぬ。増加単位による補習とか能力別指導などもその一つの方法であるが未だ学力差を生ずる要因を解消させるまでにはいたっていない。

2. 諸テスト(特に実力テスト)についての検討は十分に行なわれているか。

生徒の学習結果の成績を測定し、指導効果を評価するために諸テストが行なわれ、特に進路指導の資料をえるためには実力テストが実施されている。しかしこれらのテストに対する検討は次の点において十分であろうか。即ち出題意図(問題作成の方針)が進路指導の意図を考慮しているものかどうかということである。実施科目を選択指定制にすべきか。成績の標準点やテストの範囲を予め示さなくてもよいか。このテストが所謂「診断用」の場合とまた「進路用」の場合と区別して実施の方法を考えるべきではないか。このような問題が残されている。単なる総合成績の平均や席次からだけではその適性による進路指導は不可能であると思われる。

3. 男女の差による科目の選択は進路指導上十分に考慮されているか。

男女共学の普通課程の高校からは次第に女子の数は少なくなりつつある。これはカリキュラムを実施する場合、それが十分女子の適性を教科において考慮されていないためではなからうか。従って女子に対する進路指導においても受験科目をどのように選択させ、テストを実施するかなどいくつかの問題をもっている。

あとがき

このテーマは従来係教官において指導されてきた叢果に基づきその反省にたって今後実施したい計画の概要を示したもので未解決の点の多いことを痛感している。就職希望者については論外にしてしまったが、彼らの適性・興味の調査や職場見学や先輩の就職者との座談また事業主との懇談なども考えなければならない問

題である。「自主的に進路を選択決定する能力を養う」という目標をもつH・Rの活動においても当然進路指導が計画的に継続的に年間行なわれなければならない。そして本校のような少人数の生徒をもつ学校においても指導体制——特に組織とその運営についても研空の余地の残されているので、今後の課題としてとりくんでゆかねばならないと思う。 (鈴木記)